



ご参加いただいた神戸大学の皆様

- 発達科学部 准教授 橋本 直人 様
- 発達科学部 教授 伊藤 真之 様
- 発達科学部 准教授 岩佐 卓也 様
- 人文学研究科 博士3年 藤木 篤 様
- 人間発達環境学研究所 博士1年 近藤 洋隆 様
- 人間発達環境学研究所 修士1年 松岡 毅 様
- 人間発達環境学研究所 修士1年 松岡 佑樹 様
- 発達科学部 人間環境学科 3年 秋山 和俊 様
- 発達科学部 人間環境学科 2年 吉沼 春香 様

川崎重工からの出席者

- CSR推進本部 地球環境部 部長 藤井 貞夫
- CSR推進本部 CSR部 CSR企画課 課長 柿原 アツ子
- CSR推進本部 地球環境部 上級専門職 鐵 寛治
- CSR推進本部 地球環境部 上級専門職 原 剛敏
- CSR推進本部 地球環境部 上級専門職 辻 博

ステークホルダーミーティング「環境・社会報告書を読む会」

川崎重工グループのCSR活動について広く意見をお聞きするために

2008年版を読んで
2009年6月4日開催

川崎重工グループは1999年に初めて「環境報告書」を発行し、2008年版がちょうど10年目になります。これをひとつの節目と捉え、2009年度から、新しい視点での取り組みを展開していきたいと考え、神戸大学の先生方と学生の方をお招きし、「環境・社会報告書を読む会」を開催しました。神戸大学と川崎重工グループの関わりは深く、神戸を地元ととともに100年以上の歴史を歩んでいます。そのような身近なステークホルダーの皆様からの率直な意見や疑問をお聞きし、報告書の改善はもちろん、CSR活動のさらなる推進に結びつけていきたいと考えています。



CSR推進本部
地球環境部 部長
藤井 貞夫

※黒字＝神戸大学 青字＝川崎重工

テーマ1 環境・社会報告書全般について

読者にとって、より理解しやすい報告書づくりを

辻 まず、報告書全般に対するご意見をお伺いします。

藤木様 報告書に記載されている用語についてですが、一般の方々の理解しやすさを考えるなら、横文字の濫用は控えた方が良いのではないのでしょうか。この報告書を知人にも見てもらったところ、「ミッションステートメント」「ステークホルダー」「コンプライアンス」「コーポレートガバナンス」というのが良くわからないというのです。そして、それらを翻訳して説明すると、「日本語のほうがわかりやすい」という意見をもらいました。

辻 ミッションステートメントについては「社是」とか「社訓」という用語がありますが、どちらがわかりやすいかは難しいと思っています。その時はどのように説明されたのですか。

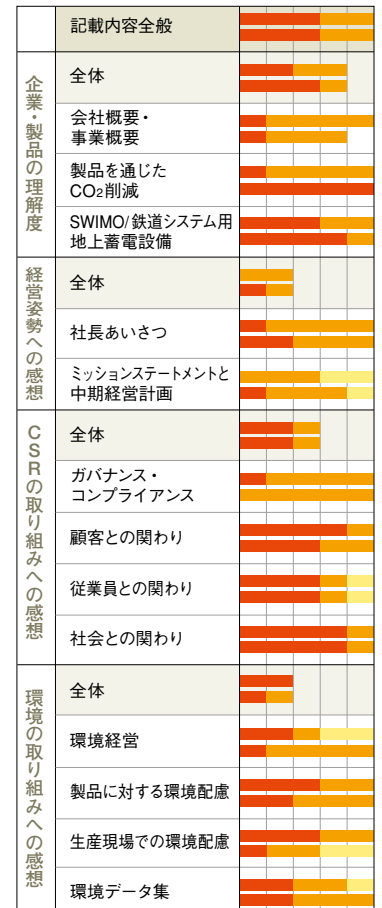
藤木様 ステークホルダーは「利害関係者」。これは、非常によく使われる用語です。コンプライアンスであれば、法令を守る「法令遵守」、そしてコーポレートガバナンスに関しては「企業統治」や「内部統制」。やはり漢字の方が、一般の方々にとって理解しやすいと思います。

原 用語については、社内でのステークホルダーミーティングにおいても議題になりました。毎日の業務でCSRや環境に関わる私たちの中では、当たり前のように使ってしまう用語です。

橋本先生 学者・研究者は難しい横文字を用いる、と思われがちですが、私どもの哲学・思想系の分野では、むしろ翻訳するケースのほうが多い。私個人としては、たとえばコンサルティング会社などの業界のほうが横文字を多用しているという印象を持っています。

「環境・社会報告書を読む会」 事前意見調査表 評価集計グラフ

グラフ上：報告書の理解しやすさ
グラフ下：川崎重工の取り組みのレベル
■ 高い ■ 普通 ■ 低い



0 1 2 3 4 5
人数(全数5人)

辻 用語の使い方は、読者として対象とするステークホルダーをどう考えるかによって変わると思います。当社の業態においては、やはり対象は社会人の方が中心になります。主婦の方などを含めたすべての人にわかってもらうようにするのはかなり難しい。ただ、大学生以上の方には、文系・理系どちらにもわかってもらいたいと思って作っています。

伊藤先生 今の教育では、高校生は「コーポレートガバナンス」「コンプライアンス」といった言葉は学ばない。大学生においても、経済学・経営学を専攻する学生は別として、たとえば理系なら物理学や生物学などの専門分野の勉強はするけれども、企業活動に関わる概念を学ぶ場というのが、必ずしも保証されていない。大学生の中にはそのまま主婦になる方や、企業活動に関わらない生活を送る人も少なくありません。そういう方々のことも考えて、どのように情報を発信するのかを検討しておくべきだと思います。

藤井 たとえば、家電メーカーなどの一般消費者向け製品をつくっている企業の報告書を見ると、写真やカラーを多用し、文章も短くわかりやすい。一方、当社は、一般消費者向け製品として二輪車があるが、基本的には企業向けの製品をつくっています。こうした製品を紹介しようとする技術的な内容が多くなり、文章はどうしても固くなってしまいます。改善すべき点ではありますが、業種・業態によって、情報発信の仕方はかなり違ってきます。

近藤様 大学生も人によって違います。新聞を良く読んでいる人は、企業活動のこともかなり勉強しています。就職活動をする、企業で使う用語もわかってくる。工学系の学生であれば重工業の製品に関する用語にも、ある程度馴染みはあります。

鐵 企業側の勝手ないい分ですが、「コーポレートガバナンス」や「コンプライアンス」などは、横文字かどうかは別にして、大学生であれば知っておいていただきたい概念だと思います。

近藤様 私は、最初のページに「財務データ」が載っていることに違和感を持ちました。売上高や経常利益などを一番初めに見せられると、学生の視点では“投資家向けの冊子”と感じてしまいます。

辻 この「財務データ」などの会社概要や事業概要は、報告書の重要な要素です。当社を例にあげると、約1兆5千億円の売上高を上げる企業が、約30万トンのCO₂を排出している。企業が、どのような事業内容・事業規模でどれくらいの環境負荷を出しているか。これが企業を評価する指標にもなります。また、私たちが報告書を作成する時に参考になっている、環境省やGRI※1が発行している「ガイドライン」があり、「環境面」「社会面」だけでなく、「経済面」についても報告するよう求めています。当然、投資家も重要なステークホルダーであり、「経済面」の詳細を見てもらうために「財務ハイライト」のホームページアドレスも掲載しています。

橋本先生 「財務データ」がいきなり出てきて違和感を持つという先ほどの意見は、これらと「環境・社会への取り組み」の間にあるつながりがわかりにくいということ。たとえば、事業規模と環境負荷データの関係が同じ紙面で説明されていれば、また違った見え方になるのかもしれない。

藤井 環境報告のページで、売上高に対するCO₂排出量を、分母と分子にして原単位という表現で掲載していますが、ここでも何か工夫が要るのかもしれない。

※1 GRI: 持続可能性報告の国際的なガイドラインの策定などを目的に1997年に設立された組織



発達科学部 准教授
橋本 直人 様



発達科学部 教授
伊藤 真之 様



発達科学部 准教授
岩佐 卓也 様

テーマ2 経営姿勢について

ミッションステートメントの全従業員への定着と具体的な実践に向けて

辻 次のテーマとして、川崎重工グループの「経営姿勢」に移りたいと思います。「社長あいさつ」「ミッションステートメント」「中期経営計画」についてのご意見をお伺いします。

吉沼様 最初から読んでいくと「社長あいさつ」で突然「ミッションステートメント」が出てくる。言葉の意味はわかるけれども、内容は理解しにくい。次のページに、その詳細が掲載されていますが、「社長あいさつ」の中でも、もっとわかりやすい言葉を使って説明してほしいと思います。

松岡毅様 「ミッションステートメント」を通じて、川崎重工のスタンスを明確に示されていることは良いことだと思います。しかし、「ミッションステートメント」の体系図は、「物質的豊かさ」と「精神的豊かさ」が「地球」の外にあるような錯覚を与え、矢印の意味がわかりにくいこともあり、大変理解しづらいものになっています。

辻 「物質的豊かさ」「精神的豊かさ」「地球」、この3つの絵は、限りある地球の中で、一部矛盾もある「物質的豊かさ」と「精神的豊かさ」とのバランスを考えて事業を展開していくという経営の基本姿勢を示しています。ご指摘の通り要素が多くて複雑になりすぎたのかもしれませんが。発達科学部の皆様は、「物質的豊かさ」「精神的豊かさ」といったテーマを研究対象とされていると思います。ここに関して何かコメントをいただきたいですね。

藤木様 「物質的豊かさ」と「精神的豊かさ」とのバランスをとるということは、「物質的豊かさ」を追求すると「精神的豊かさ」が減ってしまうという意味でしょうか。これらは、対立するものでも無理に両立させるものでもないと考えます。あと、「新たな価値の創造」という言葉も、具体的な指針がないため、読者は「曖昧」「漠然」といった印象を抱きかねません。

伊藤先生 持続可能な社会をつくる中で、「ソーシャルキャピタル」という観点があります。人のつながりやお互いの相互理解・信頼関係をいかにして高めていくか、という課題です。近年は、貧困の問題や、老人の孤独死など、地域の対話がないために社会が分断化されています。「ミッションステートメント」に、「精神的豊かさ」「新たな価値の創造」という言葉が大きく書いてありますが、川崎重工として今の社会にどう貢献していくのかをお伺いしたいと思います。

岩佐先生 バランスの良いことだけを書いている学生の卒業論文は、結局は何もいえていない。「ミッションステートメント」にも同じことがいえると思います。川崎重工は製造業の王道で活躍されている企業ですから、「物質的豊かさ」を根幹で支えているという大切な役割があります。その中で、社会が抱えるさまざまな問題を考えて、より洗練された豊かさを提供していくという、川崎重工の使命を改めて明確にすべきではないか。「精神的豊かさ」を提供する企業はレジャー産業など他にもたくさんあります。

辻 「ミッションステートメント」は2年前に制定されました。それまでの「経営の基本理念」にあった“優れた製品をつくる”という基本は変わりませんが、それに「世界の人々の豊かな生活と地球環境の未来に貢献する“Global Kawasaki”」という考えが加わりました。豊かな生活には、当然、“物質的豊かさ”とともに“精神的豊かさ”を含みます。従業員全員が製品を開発する時、つくる時、常にこの考えに照らし合わせて行動していくことで、製品や事業運営が「ミッションステートメント」の目指す方向に変わっていく。私は、これが“物質的豊かさ”と“精神的豊かさ”を備えた「新たな価値の創造」による社会貢献につながるのではないかと思います。

吉沼様 「中期経営計画」の「基本目標」についてもよくわからないところがあります。「選択と集中」や「質主・量従」など、そういう言葉があっても良いのですが、川崎重工として“何を選択して何に集中していくのか”ということがここだけでは読み取れない。あと、「収益力の高いグローバル企業へ飛躍」という表現があり、経営計画の数量目標が記載されていますが、この報告書の目的とは異なるような感じがします。

原 紙面の都合で「中期経営計画」の主要キーワードだけしか掲載できなかったのもので、理解いただけなかったのかもしれませんが。この「基本目標」には、CSRの観点も取り入れた具体的な指針があります。

辻 経営計画の数量目標の話ですが、経済を無視して企業は成り立ちません。経済的にも持続可能であって、初めて環境・社会への貢献が可能であると考えています。当然、経済活動自体も社会の役に立っています。社会に必要な製品を生み出す、雇用機会を創出するなど、非常に大事なことだと思います。

伊藤先生 大学1・2年というのは、企業経営や経済的価値に関わるものの見方を養っていく過程にあります。ですから、吉沼さんのコメントは等身大だと思います。大学生に限らず、企業から距離のある生活を送っている方も同じような印象を持つ可能性があるということです。

橋本先生 「環境・社会報告書」というタイトルに対し、企業人が見る時と、大学生を含む一般読者が見る時では違う見方をします。「環境」「社会」という言葉を聞くと、“良いイメージ”が頭の中をよぎり、期待が大きくなります。

藤井 経済的に持続可能であるということが、環境・社会貢献のベースになっているということを理解していただいていると一方的に思い込んでいました。このステークホルダーミーティングを通じて、いろんな見方があることを学びました。



人文学研究科 博士3年
藤木 篤 様



人間発達環境学研究科
博士1年
近藤 洋隆 様



人間発達環境学研究科
修士1年
松岡 毅 様



人間発達環境学研究科
修士1年
松岡 佑樹 様



発達科学部
人間環境学科 3年
秋山 和俊 様



発達科学部
人間環境学科 2年
吉沼 春香 様

辻 川崎重工グループは、製品・技術を通じた社会・環境貢献を「ミッションステートメント」のひとつの柱としています。特集1では「製品を通じたCO₂削減」を、特集2では「ギガセル[®]*2を使用した鉄道システムの開発」を紹介しています。これらに関してのご意見をお伺いします。

松岡毅様 特集1に関しては、CO₂削減のために広範な分野で製品が利用されており、川崎重工の技術レベルの高さを感じました。しかし、CO₂削減効果を何トン/年といった数値のみの掲載にとどめるのではなく、気温の上昇の抑制など、環境への影響を具体的に示してほしいと思います。

辻 1トンのCO₂が環境に対してどの程度の影響を与えているのかについては、IPCC^{*3}の報告でも大きな幅があり(21世紀末の気温上昇:1.1℃~6.4℃)、正確な数値はわかりません。ここで最も伝えなかったのは、川崎重工グループが新しい製品・技術を生み出すことによって、世界全体のCO₂削減に貢献しているということ。そこを理解いただければ、大変うれしいですね。

松岡佑樹様 私は、卒業論文で「路面電車の導入による都市構造の変容」を扱いました。ですから、特集2で紹介されていた低床電池駆動路面電車「SWIMO」の開発をどんどん推進してほしいですね。環境にやさしい路面電車の価値を伝えるPR活動も、CSRの一環だと思います。

藤井 ありがとうございます。現在「SWIMO」の普及拡大に取り組んでいるところです。ご期待に応えられるようがんばりたいと思います。

*2 ギガセル:川崎重工が開発した大型ニッケル水素電池の登録商標

*3 IPCC:気候変動に関する政府間パネル



CSR推進本部 CSR部
CSR企画課 課長

柿原 アツ子



CSR推進本部
地球環境部 上級専門職

鐵 寛治



CSR推進本部
地球環境部 上級専門職

原 剛敏

テーマ3 CSR活動について

社会性報告に関して

社会貢献活動のより一層の充実に向けて

辻 企業の社会的責任に関する取り組みとして、まず「社会性報告」に対するご意見をお伺いします。

藤木様 ガバナンス・コンプライアンスへの取り組みについて、報告書に書かれている内容は理解できました。ただ、ここで問題となるのは、たとえば、コンプライアンスの制度を立ち上げた後に、それがどの程度有効に機能しているのか、といったことであるように思います。コンプライアンスの実効性の確保という観点から、実際に何件の相談が寄せられ、そのうちどれだけ解決できたのかを教えてくださいたいのですが。

柿原 「コンプライアンス報告・相談制度」について、いわれるように、制度をつくってさあどうぞといてもなかなか機能しません。中には、自分が相談することで従業員同士の信頼関係が崩れるかもしれないという不安を抱く人がいたかもしれません。これに対し、制度についてさまざまな形でPRを行うことで、「報告・相談者の氏名は一切秘密にされる」という仕組みが浸透し、相談件数は増えてきました。制度の利用が増えるということは、従業員のコンプライアンス意識がそれだけ向上しているということです。昨年の相談件数は17件で、いずれも会社にとっても、相談者にとっても望ましい形で解決できました。今後も、従業員教育の拡充と浸透施策の強化に取り組み、制度の利用促進につなげていきたいと考えています。

秋山様 この報告書の中で、CSRという言葉が使われていますが、内容のほとんどが環境保全活動です。CSRとは、環境問題と同時に、貧困などの社会問題の解決に向けた社会貢献活動などを含んでいるものと認識しています。「グループミッション」の中に「世界の人々の豊かな生活」という言葉もあります。「協働の森づくり事業」のような社会貢献活動にもっと踏み込んでほしいと感じました。

松岡佑樹様 「協働の森づくり事業」のような活動がCSRの中心になると考えていました。川崎重工の事業内容から、環境面が重要であることは想像できますが、報告の量に違いがあります。もっと社会との関わりの部分を充実させていくべきではないでしょうか。

柿原 社会性報告の充実については、常に考えているのですが、改善できていないのは反省すべき点です。川崎重工グループは、国内外の各地に事業拠点があり、それぞれの立地環境や工場資源を活かした多様な地域共生活動を行っています。今後、こうした活動の報告に力を入れるとともに、さらに多くの分野に活動を広げていきたいと思っています。

秋山様 川崎重工は素晴らしい技術・製品を持っている企業ですから、それらを生かした海外への支援活動も考えられます。今後、貧困問題などにも取り組んでいくというような計画はありますか。

柿原 人道支援については、川崎重工グループでは、各国の被災地に対して現金や製品による援助を行っています。ただ、社会との関わりにおいては、単に義援金を贈るというプログラムだけでなく、それぞれの企業に適した貢献の方法があると考えています。川崎重工グループにふさわしく、川崎重工グループだからこそできることであれば、グローバルな視点を持って新しい取り組みにチャレンジしていきたいと思っています。

環境報告に関して

環境経営の推進に向けて：温室効果ガス排出量削減と環境リスク低減

辻 それでは最後に、「環境報告」についてのご意見をお伺いします。

近藤様 私は、プラス面の言及が多くてマイナス面の言及が少ないと感じました。良いことばかりが書いてあると、人間の心理として疑いの念を抱いてしまいます。たとえば、CO₂を削減したといっても、もともと大量のCO₂を排出していて環境に対して大きな影響を与えているのではないかと…。達成できていない項目を取り上げ、その対策を公表することが大切ではないでしょうか。

秋山様 「省エネルギー活動」について質問があります。「エネルギー使用量」のグラフの推移を見ると、あまり成果が出ていないように感じました。これは、生産現場での環境負荷低減活動が進んでいないからでしょうか。それとも、このデータでは読み取れない成果があったのでしょうか。

藤井 ここ数年間は、事業規模が拡大傾向にあり、その影響で総エネルギー使用量は増加しましたが、もうひとつの指標である原単位は低減しています。この原単位は売上高あたりのエネルギー使用量ですが、製品1個を生産する時のエネルギー使用量と考えるとわかりやすいと思います。原単位が低減しているということは製品1個あたりのエネルギー使用量を削減できたということです。私たちは、生産効率の向上を図ることで、この原単位を低減し、環境への負荷を可能な限り低減するよう努めています。

辻 CO₂でいいますと、現在、川崎重工グループは年間約30万トンを排出しています。中長期環境ビジョンで、京都議定書に対応した取り組みとして、2010年度の温室効果ガス排出量を1990年度比で6%削減するという目標を掲げていますが、現実には事業量の拡大などにより増加傾向になっています。私たちは、生産現場の目標としてわかりやすい原単位をひとつの指標として、できる限りの取り組みを行うことで総量の削減を目指すとともに、現在、次のステップである2020年に向けた中長期の活動計画の検討を進めています。

近藤様 企業の努力をアピールするためには、CO₂削減量についてわかりやすく解説することが必要ではないでしょうか。たとえば、企業の年間CO₂排出量は各家庭で一人が排出している量の何倍という表現をしていた報告書などは、とても印象に残りました。



「環境・社会報告書を読む会」：参加者集合写真

原 当社も「協働の森づくり事業」など、地域の森林保全事業に積極的に参加しており、こうした森林のCO₂削減効果を使うなどわかりやすく解説することを考えたいと思います。

吉沼様 「環境経営活動の実績と評価」において、達成度を「○」「△」やパーセントで自己評価していることに報告の信頼性を感じました。ここで気になったのは、「行政措置・注意事項が発生した」という箇所です。そのような事故が発生するのは、会社の方針が現場レベルにまで浸透していないからでしょうか。

鐵 今年の2月に当社の自家発電設備において、排ガス中の窒素酸化物(NO_x)の濃度が、国の定める基準値を超え行政からのお叱りを受けました。従来から各工場にはチェック・管理体制はありますが、慣れなどによるヒューマンエラー、つまりは操作ミスなどの防止が十分にできていませんでした。現在、地球環境部、CSR部および各事業部の環境担当の部課長が中心となって、第三者的な視点から遵法の状況などをチェックする「環境調査隊」を立ち上げ、各工場と連携して再発防止策の徹底に取り組んでいます。環境や安全などの問題は、常にいい続ける必要があると思います。

辻 天然ガスを燃焼させると、空気中の窒素と酸素が化学反応して、窒素酸化物が発生します。当社の自家発電設備においても、それを除去するための設備・システムの導入はもちろん、人為的なミスをなくすための従業員への教育も行っています。自家発電設備に限らず、今後とも重点目標である「違反・事故発生ゼロ」を目指して活動を推進します。

終わりに

橋本先生 このステークホルダーミーティングのお話を聞いた時は、どうなるか心配しましたが、大変良い勉強になりました。違う分野の人間が出会い、相手を知ること、さらに自分のことを知ることができる。そういう機会をいただいたことを感謝致します。学生にとっても良い刺激になったのではと思います。

藤井 今日のステークホルダーミーティングで、新しい発見がたくさんありました。反省点を含め、皆様のご意見を今後のCSR活動、そして報告書づくりに反映していきたいと思います。ありがとうございました。

「環境・社会報告書を読む会」を終えて

2008年版の報告書の編集を担当してきましたが、その総括として、この「環境・社会報告書を読む会」の企画をすることになりました。橋本先生を紹介され、すぐに神戸大学を訪問し協力をお願いをしました。先生にとっても、当社にとっても初めての試みでしたが、「できる範囲で、できるだけのことを」という考え方で協力の承諾をいただきました。

学生の募集、説明会、事前アンケートの取りまとめなど、先生に準備いただいている最中に、神戸市において国内で初めての「新型インフルエンザ」の人から人への感染が確認されました。神戸大学も5月18日から一週間の休校になり、一時はこの「読む会」の開催も危ぶまれました。この影響で少し準備不足になりましたが、却って率直な意見交換ができたような気がします。当社が適切にお応えできたかどうか不安も残りますが、社外の方から当社がどのように見えているかなど新しい発見もあり、良い場が持てたと考えています。学生の皆様からも参加して良かったとの感想をいただき、主催者としても嬉しく思っています。



CSR推進本部
地球環境部 上級専門職
辻 博